

根羽村森林組合

調査団体名	: 根羽村森林組合	団体代表者名	: 大久保憲一
設立年	: 1951(昭和26)年	対応してくれた人の名前	: 今村 豊
団体URL	: http://www.mis.janis.or.jp/~nebasin/		
活動拠点	: 長野県下伊那郡根羽村407-10	調査員	: 洲崎燈子、高橋伸夫
取材日	: 2013年11月27日	レポート作成者	: 高橋伸夫

活動内容

従業員は43名。組合員の森林整備と生産木材の加工で年間総売上は4億円弱。年間200haの間伐を行っているが、材の搬出は52～60ha程度で材積5,000～6,000m³である。製材加工売上は2億2千万円程度であり、在庫の材や根羽村以外の材を含め年間約2,500m³を加工して工務店に直送している。住宅1棟あたりおよそ20m³なので、年間およそ130棟分にあたる木材製品を出荷している。

キャッチフレーズ

山の民の志で進める森づくりと木づかい

会のモットー(何を大切にしているか)

全ての森林資源を活かした持続可能な森林づくり、林業の理想を目指す。その担い手が森林組合であり、森林組合がまず中心となって持続可能な村づくり、地域づくりに率先して取り組む。

設立から現在に至るまで変化したこと

1995年からは再興期で、村内の民間製材工場の閉鎖に伴い村で設備を購入。2006年、建築士会に材料屋として入会(工務店や設計士の満足する製材加工をする)。2000年頃、乾燥技術の確立。2013年3月、JAS規格取得。現在、林産技能職員(約10名)の全てがIターン者である。

連携している団体・専門家・自治体など

安城市、明治用水、アイシングループ、信州大学農学部、岐阜女子大学、JIA長野建築士会(建築士・工務店)、矢作川流域圏懇談会

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

伐採・搬出の1次、製材次加工の2次、工務店への直送販売による3次の6次産業化。切り捨て間伐の未利用材を木の駅プロジェクトで収集し、特別養護老人ホームの薪ボイラーで使用するNPO「薪の駅」の設立を2014年4月に計画しており、材の収集・乾燥から燃焼までの作業を4,500円/m³で担当する。小中学生まで木の駅プロジェクトの登録対象として、地域通貨がお小遣いになるようにする。

現在直面している課題

- ・製材加工の利益率向上。全ての地域資源を活かした産業の創設による雇用と生業の確保。
- ・Iターン職員の定着率向上。

今後やってみたいこと

JAS工場の資格を活かして矢作川下流域への販路拡大を図りたい。このため、長野・愛知・岐阜・静岡の各知事に木づかいプロジェクトリーダーになってもらい、根羽村村長を含めた5者での対談を企画したい。建設予定の小さく住まう魅力的な木の住まいをモニター体験しながら、林産資源の活用や田舎暮らしの良さについて話し合う中で各県の対策事例の紹介や情報交換を行い、行政の壁を超える協力体制などを構築してもらおう。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

3県の森づくり・木づかいのキーパーソンを発掘し、森づくり・木づかい推進のワーキングショップ・ブレインストーミングを行いたい。キーパーソンとは各県の林業普及指導員、地域材中心の工務店、木工クラフトマン、建築士、建築士グループ等の木づかい推進団体と、耕ライフ、とよた森林学校等の木育活動団体など。彼らが既に行っている取り組みをライフステージアタック表(各ライフステージでの木づかい推進アイデアを一覧表にしたもの)の実践活動として紹介し、さらに多くの市民を森づくり、木づかいの世界に誘いたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>1ターンの定着率は？ 定着率向上の対策は？

<答え>定着率は正直に言って良いとは言えない。自分の技能や生活水準を上げることが優先して、地域よりも個人の力としたい考え方の者もいる。技術を習得した3年目程度で転出されると落胆が大きい。本人の問題でなく、同伴者が地域になじめない場合も定着を阻害する。根羽村での林業を志す1ターナー者に対して「根羽村森林組合 基本理念・存在意義」というマニュアルを作成配布して、組合や作業の詳細説明からモチベーションの維持方法、根羽村へのなじみ方などを解説。

チームオリジナルの質問

<質問内容>低コスト造林に着目した理由は？

<答え>山主へ還元金の確保が必要。職員の各種保険や手数料等でもコストが掛かるので、補助金もできる限り確保して林産収入を補填したい。間伐を15~20mの帯状伐採とすれば3回程度に分けて伐採ができる。伐採と同時に植栽も行えば植栽の補助金も受けられ、コンテナ苗を使用すれば作業効率も高くなる。さらに獣害対策を施せば、獣害対策補助金も受けられる。伐採跡に人工芝を敷いて獣の動きを変え、罠にかかりやすくするなどという案もある。

その他、伝えたいこと

●**トータル林業の実現**:「トータル」には根羽村の全員が組合員であることと、木の全てを活かすという意味を含む。材として使用される部分はもちろんのこと、端材や木の皮・オガ粉なども残らず利用する。以前は材の乾燥に灯油を使用していたが、現在はこうした木くずを活用している。さらに、枝は小型ストーブの燃料に。また、葉からアロマオイルを抽出できないかなども検討。

●**長野県以外への進出・拡販**: 村民全てを森林組合員とする政策を継続して人工林率73%。村で木材加工工場を保有して今年JAS規格を取得、準備は整ったわけである。この根羽村で林業が成り立たないとすれば、国内どここの林業も成り立たないということである。矢作川の水源として下流域から認められ交流してきた歴史もある。矢作川の流域である愛知県に根羽村の森林製材を普及させたい。また、同じ流域で疲弊している林業を回復するために根羽村の製材工場やノウハウを活かしたい。例えば、豊田市産の材を根羽で製材し、JAS製品とするといったことが考えられる。

●**里山資本主義**: 里山の産物を活用し、流通させたい。豊田市足助地区の香嵐渓は里山を観光資源として確立した成功事例。すてきな森と木と水、そこで過ごすすてきな時間は商品になる。そこで生まれるスモールビジネスを生業にしたい。

写真



根羽杉の家で見学者に説明する
今村氏(右)



低コスト造林試験地



プロセッサによる造材

年表

年	できごと
1958 昭和33	村内各戸へ13haの貸付山制度実施
1966 昭和41	貸付山貸付料廃止(年間800円)
1979 昭和54	矢作川水質保全対策協議会へ加入
1981 昭和56	根羽中学校が安城市七夕祭りに招待(以後毎年)
1982 昭和57	根羽村森林組合が全国優良組合として表彰を受ける 安城市野外教育センターが茶臼山に完成
1992 平成4	緑化推進運動功勞により内閣総理大臣表彰を受賞
1995 平成7	村内民間製材工場閉鎖に伴い、村で設備を購入
2005 平成17	長野県ふるさとの森林づくり条例に基づき「森林整備保全地域」に全村指定 根羽杉の柱50本提供事業開始 アイシングループと森林の里親契約を締結
2006 平成18	「ふるさとの森づくり県民の集い」を根羽村で開催 根羽杉モデル住宅「杉風(さんふう)の家」完成 川上村・根羽村村有林交換盟約書調印
2009 平成21	組合事務所の改築。「森づくり」と「木づかい」の職場が同じ場所になる

2006～2012年 製材加工場施設の拡充(製材・加工・乾燥機、構造材用モルダー、木質ボイラー)